令和4年度　大田区立小池小学校　自己評価　報告書

令和4年4月1日

○　本校の概要

学級数25　児童数826名である。
オープンスペースという恵まれた環境と大規模校の強みを生かし、学級、学年の壁を越えた交流活動を行い、豊かな心とコミュニケーション能力の育成を図っている。
おおた教育ビジョン　プラン1「未来社会を創造的に生きる子どもの育成」に重点を置き、「未来ものづくり科」の教育研究推進校として研究を行っている。

○　自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標		成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄 評価	人数	コメント
プラン1　未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化にしなやかに対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とのコミュニケーション能力の育成等を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	5、6年生のアンケートで、「コンピュータやインターネットなどを活用して、情報を収集して自分の考えをまとめたり、発表したりすることができる」と回答した児童の割合 ※5・6年生 アンケート回答数264名	4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	4 95%	教科「おおたの未来づくり」の新設に向けて、2年間の研究の成果を発表することができた。創造的な資質・能力を育成するために各学年に応じた系統的、教科横断的な指導を行うことができた。 今後も「おおたの未来づくり」の実現に向けて、教育委員会と連携を図るとともに、継続的に実践していける年間指導計画を作成していく。 タブレット端末の活用については、毎日授業で活用しており、抵抗なく児童は使用することができている。主に、意見交換や情報収集、資料作成などについて、各教科で取り組むことができた。	A	11	○タブレット端末の活用は素晴らしいです。子供もプログラミングを学んでおり、ビックリしました。タイピングのクラスがあると良いと思いました。 ○教職員の皆様には感謝いたします。
		論理的、科学的な思考力の育成を目指し、「おおたのものづくり」を生かした体験活動や理数授業等を実施する。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4					B		
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。	4:設置教室を使用する全正規教員が週1回以上活用した。 3:80%以上の正規教員が週1回以上活用した。 2:60%以上の正規教員が週1回以上活用した。 1:60%未満であった。	4					C		
		他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4					D		
		体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組」運動や「一学級一実践」運動を実践する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4							
プラン2　学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4	児童アンケートで「学習(授業)が楽しい」と回答した児童の割合 ※児童アンケート 回答数808名	4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	3 88%	学期ごとに学習カルテを活用して、児童、保護者に学習の到達度やつまずき等を知らせることができた。 また、タブレット端末を活用し、算数ステップ学習(電子版)やタブレットドリル等、様々なコンテンツに取組み、一人一人に応じた学習が提供できた。 今後は、学習者用のデジタル教科書の効果的な活用方法について検討していく必要がある。 3・4年生の算数補習教室では、学習補助員を活用して、つまずきの多い学習内容について個別に対応することができた。	A	10	○ステップ学習の回数を増やすのは、時間がとれない場合もあると思います。取組指標を変えることはできないのでしょうか。
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に2～3回知らせた。 3:学期毎に知らせた。 2:年度間に1回は知らせた。 1:お知らせできなかった。	3					B	1	
		学習補助員等による算数・数学・英語の補習を実施する。	4:対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3:80%以上の教員が働きかけた。 2:60%以上の教員が働きかけた。 1:60%以下の教員が働きかけた。	4					C		
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4					D		
プラン3　豊かな心の育成	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心をはぐくみます。	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	児童アンケートで「自分にはよいところがある」と回答した児童の割合 ※児童アンケート 回答数808名	4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	3 87%	毎週の生活指導夕会において、いじめや不登校、問題行動に関する情報共有を行い、未然防止、早期発見、早期対応になるよう組織的な対応を行った。 また、交通安全や社会のルール、校内の決まりなど、適宜教職員で共通認識し、指導の徹底につなげることができた。 道徳授業地区公開講座では、感染症対策を講じて実施することができ、保護者へ道徳教育への理解・啓発を行うことができた。また、講演会においても講師の先生を招き、子どもに寄り添った育て方等についてお話を聞くことができ、参加した保護者からも関心の高い内容を実施できた。	A	8	○子供の問題行動に対して、PTAでも何かできることはないか考えていきたいです。 ○コロナ禍で外部の先生を招くのは難しかったかもしれないと感じました。
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4:学期に2～3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	2					B	2	
		学校生活調査(メンタルヘルスチェック)の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					C	1	
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					D		
		問題行動・不登校問題等にかかわる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	4:必要な事案に対して必ず会議を実施し、組織的に対応した。 3:必要な事案に対しておおかた会議を実施した。 2:必要な事案に対してあまり会議を実施しなかった。 1:必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的な対応をしなかった。	4							
プラン4　体力の向上と健康の増進	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	継続的に体の柔軟性や巧緻性を高めたり、瞬発力を向上させたりするための取組をした学級の割合 ※対象学級26学級	4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	4	令和3年度の体力テストの結果から、今年度は「柔軟性」「巧緻性」「瞬発力」を中心に朝の運動朝会を行った。学期ごとに課題を定め、教室でできる運動を教員が計画的に実施し、動画配信をして継続的に取り組むことができた。 食育については、栄養士が計画的に取組み、毎日の給食の献立の説明を担任をとおして行うことができた。	A	11	○運動は健康の基本と思っています。引き続き、楽しい運動の指導に心掛けてください。
		給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらいとした「食育」を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4					B		
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4					C		
									D		
プラン5　魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくります。	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	3	保護者アンケートで「楽しく分かりやすい授業を行っているか」と回答した保護者の割合 ※保護者アンケート 回答者数400名	4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	3 88%	学校公開のアンケートは、学年、学校で共有し、良い部分は広げ、いただいたご意見については可能な限り改善を図った。 各教職員の専門性を生かし、研修で学んだことや研究発表会に参加した際には、校内研修等を通じて、情報共有を図ることができた。また、若手教員を指導する教員が、組織的にOJTを実施し、教員の資質向上を図った。 今後は、ICT機器をより活用して、研修内容や教育情報について教職員同士の共有を積極的に図っていきたい。 校内特別支援委員会を定期的に実施し、都の心理士や外部の専門職のアドバイザー等に来校していただき、特別支援教育についての推進を図ることができた。	A	10	○やはり、コロナの影響を受けているのではないかと感じます。
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。	4:学期に2～3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3					B	1	
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					C		
		校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	4:月1回以上行った。 3:学期に2～3回行った。 2:学期1回以上行った。 1:実施しなかった。	2					D		
プラン6　学校・家庭・地域が一体となって共に進める教育	学校・家庭・地域が担う役割などを明確にし、地域に開かれた教育の実現を目指します。また、相互の連携を深め、子どもを育てる仕組みを作ります。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2～3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	保護者アンケートで「保護者や地域と連携しながら教育活動を進め、開かれた学校とする努力をしている」と回答した保護者の割合 ※保護者アンケート 回答者数400名	4:90%以上 3:80%以上 2:70%以上 1:70%未満	3 81%	学校のHPについては、定期的に更新を行い、学校の情報を発信することができた。また、今年度から学びポケットの保護者連絡機能を活用して、より詳細な情報を周知することができた。まだまだ連絡等を含めた電子配布、電子送信については、慣れていない保護者もいるため、継続的に呼びかけていく。 地域教育連絡協議会では、今年度は紙面開催ではなく、集合しての開催ができ、学校からの情報提供ができた。また、授業での様子を見ていただいたり、学校へのご意見・ご感想を直接聞くことができた。 学校地域支援本部を有効活用して、各学年で校外学習の保護者ボランティアやゲストティーチャー等の協力をいただくことができた。	A	10	○学校行事や授業等を参観する機会があり、とても良かったと思います。また、その際先生方の声も直接聞くことができて、学校の様子もよく分かりました。 ○交流を深めることはできませんでしたが、目を配ることは行ってまいります。 ○教職員の皆様の熱意溢れる御指導と、PTA、地域の方々のお助け等によって、子供たちが元気に笑顔で登校できていることに素晴らしさを感じています。 ○取組指標と成果評価を比べると少しずれがありました。『何回実施したか。何回発信したか』と回数だけで評価せず、内容の充実に目を向ける方が良いかと思います。たくさん実施・発信したからといって、保護者の理解度が高くなるとは限らないので、内容に工夫があるかもしれないと思いました。
		地域教育連絡協議会において、児童・生徒の変容等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	4:毎回情報を提供した。 3:おおむね情報を提供した。 2:あまり情報を提供しなかった。 1:情報を提供しなかった。	4					B	1	
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実践する。	4:学期に2～3回行った。 3:学期1回以上行った 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。	4					C		
									D		

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。
○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である　B:自己評価はおおむね適切である　C:自己評価は適切ではない　D:評価は不可能である　の4点について、評価した人数を記載する。